【蒼い無花果】参加作品

迷子の遊園地　【あと少し絶望】

藤田ヒロシ

舞台上に椅子（またはソファー）、テーブルがあり、椅子の一つには「妹」が座っている。「妹」はピクリとも動かず、目を閉じている。

妹の声　少女は夢の中

空飛ぶ白いイルカの背に乗って　探している

怒りで霞む大地を離れ

空飛ぶ白いイルカの背に乗って　探している

悲しみで濁る海原を捨て

〈あの雲の向こう？〉

〈あの陽の向こう？〉

〈あの夜の向こう？〉

空飛ぶ白いイルカの背に乗って　探している

探し物を探している

〈ねえイルカさん　見つかるかしら　見つかるわよね〉

少女は夢の中

それが夢だという確信はないけれど

少女は夢の中で探し物を探している

「お姉ちゃん。お姉ちゃんの探し物は何？見つかった？ねえ、お姉ちゃん」

「姉」が帰ってくる。紙袋をテーブルに置いて、

姉　ただいま。

部屋の隅に置いてあった瓶を手にし、コート（またはジャケット）のポケットから取り出したお金を入れる。そして、その横にあった小さなノートにその金額を書き込む。

姉　あと少し。

ノートを閉じて、それを掌でポンポンと数回祈るように叩く。

姉　今日はね、少し多めに稼げたかたら、いいよね？

ビニールから缶ビールを２本取り出す。

姉　いいよね？（間）ありがと。

コートを脱いで、もうひとつの椅子にそれを掛ける。自分は座らない。

姉　たまには付き合ってよね。

「妹」の手にひと握らせる。そして、自分の缶ビールをあけ、合わせる。

姉　おつかれさまっ。

一気にあおる。そして、むせかえる。

姉　しみる。

椅子に座ることなく、テーブルにしがみつく「姉」。

姉　明日は雨降るかな？降るよね。もう三日も降っていないんだもんね。降る時、降らないと、あとで困るからね。

しばらく、呆然とする「姉」。

姉　明日、雨か。

と、ビールを一口。

姉　そりゃね、必要だとわかっていても、イヤはイヤよ。（間）あ、アンタ雨好きだったね。傘差して、長靴履いて、レインコート着て、飛び跳ねて。意味わかんない。あれってさ、あの格好するのが楽しかったわけ？「雨が降った時だけ」っていう特別感でテンション上がってたわけ？だとしても、はしゃぎすぎだったよね。（間の後、思い出し笑いをして）一度……あれ幾つの時？新しい赤い傘を買ってもらったけど、雨が全然降らなくて。我慢できなくなってお風呂場でシャワー流して、その下で傘差して。お母さん怒ってるのに、アンタは満足げな顔してさ。「すごいな、コイツ」って思ったよ。あの歳で姉が妹をリスペクトって、相当よ。

姉　言ったことなかったけど、私もやってみたのよ。だって、アンタがあまりにも楽しそうだったからさ。確かめてみたかったのよ。「どんなもんなんだろう」って。全然、面白くなかった。風呂場で傘差して。で、何？頭ん中「？マーク」いっぱい浮かべてた。（間）やっぱり、雨は嫌い。気分は沈むし、売り上げも沈むし。

続きを飲み込むように、ビールを飲む。

姉　大丈夫よ、大丈夫。無理なんてしてないって。ちゃんと食べてるし、ちゃんと寝てる。体が資本だしね。妹に心配されるほど落ちちゃいませんよ。

瓶の横の小さなノートを手にして「妹」の横に立つ。それを開いて、

姉　あと少しだから、待っててね。ほら、目標まであと少しでしょ？このところ景気が上向いてきたんだ。空振りも少なくなったし。え？大丈夫よ、大丈夫。ほら見て、このペースなら……クリスマス！今年のクリスマスには間に合うよ！久しぶりにツリーなんて飾ってお祝いしようね。ケーキも手作りしちゃおうか？え？そうね、すぐには無理ね。でもさ、ツリーだけでも飾ろうね。あと少し、あと少しだからね。

ノートを定位置に戻す。

姉　あ、あの煙突が取り壊されるんだって。ん？今日の客に聞いたのよ。週明けにはニュースには載るだろうって。「やっと」？「いよいよ」？どっちでもいいけど、どれだけの人がそのニュースを心に留めるだろうね。「あぁ、まだあったんだ煙突」って、ちょっと思い出すだけ。過ぎた時間をほんの一瞬で振り返るだけ。ずっと見上げ続けてきた私たち事、これからも決して終わりを迎えないこの街の事なんて知ることはない。うん、わかってるよ。そんなことは求めてないよ。煙突から舞い上がる煙がなくなれば、それで解決だと終わり。何処かで「終わり」としなければ、次を始められない。わかってる。でもね……。

ビールを飲む。

姉　熱病のような好奇心でしかなかったけど、あの時立ち上がった声に期待をしてしまった。その事実は消せない。変えられるのは自分たちだけ。そうわかってるのに！私だけ。そう決めたのに！あの高揚が今も何処かに潜んでいて、街角に立っている時、シャワーを浴びている時、化粧を落としている時、突然に声を上げる。（間）今だってそう。週明けのニュースで今度こそ消えない声が立ち上がると……。

窓の外を見るように

姉　ねぇ、この街の空も少しは広くなるかな。

残りのビールを飲み干し、空き缶を弄ぶ。

姉　古本屋の前を通ったら偶然目に入ってね。

コートのポケットから文庫本を取り出す。

姉　買っちゃった。覚えてるでしょ、これ？覚えてるよね。私が買った本だったけど、いつの間にかアンタの本棚に収まってたんだから。覚えてるよ。そういうことは忘れないの！

本をめくる。

妹の声　オレンジの夕日が残した淡い光が

闇に溶け込む少し前
その美しい影は現れた
少女は心臓が止まるのを感じた
その美しい影は近づいてくる
少女は心臓が踊りだすのを感じた
その美しい影が話しかけてきた
『君の行きたい世界に連れて行ってあげる』
少女は心臓がどうなっているかわからなくなっていた
〈ずっとこの浜辺で待っていたの　来てくれたのね〉
〈あの海の向こう　あの空向こう　ずっと夢見ていたの〉
〈やっといけるのね〉
オレンジの夕日が残した淡い光が
闇に溶け込むその瞬間
少女はその美しい影と一つになり　その向こうへと消えた

姉　ん？影の正体？またその話？昔よく話したね。アンタは「美しい」、私は「影」。その言葉に心を掴まれて、いつも平行線。いつも楽しかった。アンタは「見えないことに怯える」ことがなかった。いつも馬鹿にしていたけど、心の中では羨んでた。嫉妬してた。本当よ。「怯えないのは自分の内側に光を感じられてるからなんだ」って。だから、光が闇に溶け、影と少女が一つになって消えても、アンタにはハッキリと見えている風景があるんだなって。

と、本をパラパラとめくる。

姉　ねぇ、今でもアンタには見えているの？

本を閉じる。

姉　ねぇ、何を見ているの？！ねぇ、教えて、答えて！？

しばらく、呆然とする「姉」。

姉　アンタが発病した時思ったの。「なんで私じゃないんだ」「変わってあげたい」って。だってそうでしょ？怒りで霞む大地でも、悲しみで濁る海原でも、アンタに

は光があって、いつだって笑顔で前を向いて歩いて行ける。そんなアンタなのに！なんで私じゃないんだ。私なら簡単に諦める。簡単に闇に消えるのに！

でもね、今は違う。「アンタでよかった」って思うの。だって、アンタに今の私をやってほしくないから。アンタにはこんな生き方してほしくないからさ。これがよかった。全然、そういうことじゃないけど、どちらかがってことなら、これかなって……そう言うこと。そういう意味ではさ、神様っているのかなって。どんなに暗く暮れても、闇ってわけじゃないのかなって。

「妹」の手にあったビールを手にする。

「あと少し」の今になってようやく考えられることがあるの。目覚めたときに、眠っていた間のことをどこまで話そうって。アンタのことだから、何も話さなくても察しを付けるだろうね。嘘を話せば、それとわかって騙されてくれるだろうね。でも……違うね、だからだね。ちゃんと話さないといけないのかなって。話せばきっと怒るだろうね。泣いて怒る……だろうね。「お姉ちゃん、馬鹿じゃないの！」「そんなことしてお金作って、それで私が“ありがとう”って言うと思ってたの？」「お姉ちゃんの人生を犠牲にして、私が喜ぶ。そんな人間だと思ってたの？」「最低」……これくらいは言うよね。言うよ、言う。わかってるんだから。

姉

ビールの缶を弄ぶ。

私はなんて応戦するかな？「これしか方法がなかったの！」「大金用意するのに綺麗事なんて言ってられないのよ！」「買うやつがいるから売っただけよ！」……そう開き直るのかな？「アンタを助けたかったの」「二人きりの家族じゃない。助けたいに決まってるじゃない」「妹のためなら何だってするわよ」……私も泣くかな？わからない。「助けてもらってその言い方はなんだ！」ってキレるかもしれない。それでもいい。そして、アンタが「助けてほしいと頼んでなんかない」ってなって大喧嘩になってもいい。なんでもいい。声が聞きたい。

缶を開け、一気に飲む。そして、むせかえる。

姉

絞り出すように言葉をつなぐ。

アンタを輪切りにした写真を何枚も見せられた。聞いたことない単語を呪文のように聞かされた。意味はわからなくても伝わる。「あぁ、絶望的ってことなのね」。この街で育ったんだし、噂も散々聞いてきた。「運命」って片づけて、受け入れる下地が無意識のうちに出来ていたんだって気付かされた。「わかりました」って口にするのは簡単だった。けれど話はそれで終わらない。「方法はあります」。人間、心から驚くと何も反応できないって言うけど、頭の中で三回繰り返してようやく理解出来た。「お願いします。妹を助けてください」。私は拝んだ。何度も、何度も。目の前に立っていたのは白衣を着た天使？神？同じ人間とは思えない存在。

ビールを飲もうと手にするが、口には運ばない。

姉　そこに言葉が降ってきた。「ですが大変高額な費用がかかります」

ビールを飲もうと手にするが、口には運ばない。

姉　十数年前ならなかった話。「運命」と受け入れるしか道はなかった。でも「幸運」とは限らない。藁さえ掴もうとする状況で、それより確かなものがある。けれど、手の届くところにそれはない。身が張り裂けそうに伸ばしてみても指先が触れることさえできない。心が張り裂けそうに悲鳴を上げても、それを声に変えることさえできない。受け入れる下地なんてあるはずもない。絶望。天使も神でもなく、所詮ただの人間。同じ人間。「こっち」と「あっち」の違いだけ。

ビールを飲もうと手にするが、口には運ばない。

姉　「君では無理だ」そう決めつけている目が悔しかった。「お金ないんだ、ごめんね」ってアンタに詫びるのが悔しかった。条件反射で「お願いします。妹を助けてください」と拝んだ自分が悔しかった。「助けたい」。確かにそれもある。でも、悔しさを晴らしたい。それなの。姉としての見栄。そんなものかもしれない。カッコよくもないし、美しくもないのよ。

ビールの缶を振り上げる。停止。力なくテーブルに戻して、

姉　なんでもいいじゃない。なんでもいいよね。……声が聞きたい。それが叶わないなら……叶わないなら！

ビールの缶を強く握り、何度も何度も首を振る。

手が本に触れ、テーブルから落ちる。それを拾い、開く。

妹の声　少女は夢の中

空飛ぶ白いイルカの背に乗って　探している

怒りで霞む大地を離れ

空飛ぶ白いイルカの背に乗って　探している

悲しみで濁る海原を捨て

〈あの雲の向こう？〉

〈あの陽の向こう？〉

〈あの夜の向こう？〉

空飛ぶ白いイルカの背に乗って　探している

探し物を探している

〈ねえイルカさん　見つかるかしら　見つかるわよね〉

少女は夢の中

それが夢だという確信はないけれど

少女は夢の中で探し物を探している

本を閉じる。

椅子に座って。

姉　「お姉ちゃんの探し物は何？」。いつもそう聞いてきたね。私の探し物か……今聞かれたら、なんて答えるかな？求めるものばかりで、何も探してなんていないのかもしれないね。

姉　ねぇ、どんな夢を見ているの？探し物は夢の中？　それなら夢は覚めない方がいい？

目を閉じる「姉」と。当時に「妹」の右腕が先かを指すように上がる。その後、力なく落ち、「姉」は眼を開ける。

「妹」の背後に立ち、髪を撫でる「姉」。やがて、抱きしめ、そして、その手が「妹」の首元で止まる。

FIN

上演記録

映像・うた・演劇「蒼い無花果」参加作品

「あと少しの絶望」

2014.6.29（sun）15:00～/18:00～

会場：ZOOT HORN ROLLO

作・演出　藤田ヒロシ

出演　姉…北澤さおり／妹…鈴木麗美／妹の声…喜友名加奈

スタッフ　れいこ／白柳友紀

無断使用・転用禁止